読書メモ２０１９年5月号

樹木希林語録

一切なりゆき

（文春新書･2018 年）ほか

やなぎさわかつひろ
柳沢克央　編

（信州･上田仮説サークル）

2019 年 5 月 19 日（日），5 月例会用レポート

◇はじめに ―

　前回までの「読書メモ」と同様，サークルで発表することを目的とすると，読書がはかどるので，今回もこのメモを作成しました。自身のため，記録を残すことが第一目的です。みなさま，よろしく（適当に）おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり，引用あり，要約あり，感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。

（私物）と書き添えてあるもの以外はすべて屋代高校図書室蔵書。

なんだか私は，仮説実験授業の運営がとても上手くなりました。生徒たちの感想から分かることですので，自画自賛には当たらないと思います。何故かはハッキリとは分かりませんが，上田仮説サークルで発表するという修行なしには考えられないことだと感謝しています。みなさま，いつもおつきあいいただき，ありがとうございます。

◇今月までに読んだ本

◎谷田和一郎著『立花隆先生，かなりヘンですよ』（洋泉社・2001 年）（私物）

かつて「知の巨人」と称されていた文筆家・立花隆氏の言説の「あら探し」をして徹底的に分析した本。当たっていることも多いが，この種の本は本気で読む気になれない。著者は東大で立ち話の講義を聴いて最初は感心していたが，徐々にその「おかしな点」に気づいてこの「告発本」を書くに至った。

結論として，「立花氏はビッグネームではあるが，オカシナこともたくさん言っている」という週刊紙ネタの拡大版。しょせん，立花隆という人は出始め（ロッキード事件での田中角栄告発）からその程度の人だと認識しておけばよかったというだけのこと。ビッグネームにもいろいろあるということが分かったことが収穫といえば収穫。同時に，この種のことを告発して喜んでいる著者も著者，同一レベル。要するに問題

意識のレベルが大切だということ。

◎樹木希林語録『一切なりゆき』（文春新書・2018 年）

樹木希林の生前の語録を編集して編んだもの。読みやすい。類書多数あり。いわゆる「追悼ビジネス」本。内容は充実している。だが，冷静に見てみれば『老子』『荘子』や「他力本願」と内容は似たかよったかで，そこに名女優，樹木希林のテイストを加えて今日的に出力したものと考えれば，内容は予想の範囲内に収まる。その点で，樹木希林の人生の独自性は認められるが，古典的な多くの独自性を持っているとは言い難い。

その中でも私が注目したのは「俯瞰」という言葉を用いている次の三カ所。ここは抜き書きに値する内容を含んでいると思われるので紹介して，勉強してみる。

＊

俯瞰で見るクセがついているので，わりと思い違いがないんですよ。これが私が役者になった特典，利点だなと思うの。普通の人は，ここまで客観的に自分の姿を見ることがあできるとは思わないから。

勘違いしたまんま一生を送り切れれば，それもまた幸せではあるけれど，どこかで気づかなければいられなくなる。人生は多分，そういうものだと思うのよ。（2016 年 5 月）（32 ペ）

＊

「もっと，もっと」という気持ちをなくすのです。「こんなはずではなかった」「もっとこうなるべきだ」という思いを一切なくす。自分を俯瞰して「今，こうしていられるのは大変ありがたいことだ，本来ありえないことだ」と思うと，余分な要求がなくなり，すーっと楽になります。もちろん人との比較はしません。

これはやはり，病気になってから得た心境でしょうね。いつ死ぬかわからない。諦めるというのではなく，こういう状態でもここまで生きて，上出来，上出来。そのうえ，素敵な作品に声をかけていただけるのですから，本当に幸せです。（2018 年 5 月）（65 ペ）

＊

私はお仕事で関わっている人達を,自分を含めて俯瞰で見るようにしているんです。そうすると自分がその場でどんな芝居をするべきかがとてもよく分る。初めてこの世界に入った時に，俯瞰で見ることを覚え，どんな仕事でもこれが出来れば，生き残れるなと感じましたね。（2002 年 8 月）（133 ペ）

＊

物事を俯瞰で見ていますとね，自分がどうすべきかが見えてくると同時に，他の役者さんがそのシーンでどう演じるべきかも見えてくるんです。まあ，私と絡まないところでは別に構わないのですが，関わっているところで，まったくお門違いなこだわ

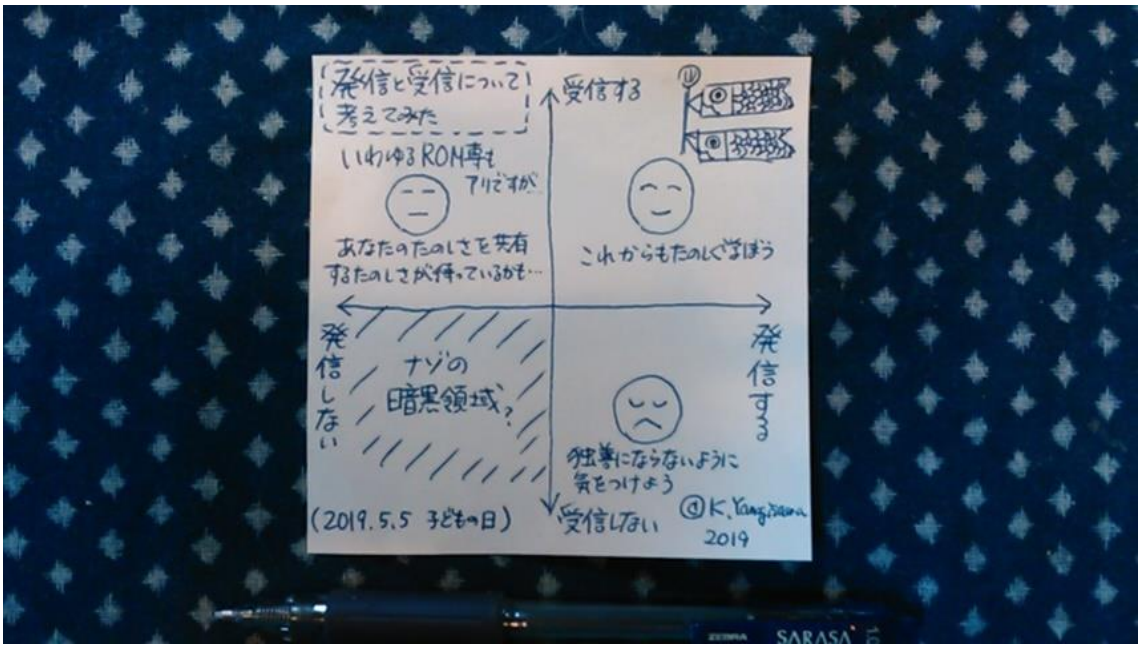
り方をしている役者さんがいると，どうしても「何やってんの，あんた」って，ズバッと言っちゃうんですよ。それがどうもあまりに的を射ているものだから，傷つくらしいんですよね。的外れだと頓着しないんだろうけど，それでへこたれて役者辞めようなんて思っちゃう人もいるようで，今は会う人ごとに，昔のことを謝って歩いている人生ですよ（笑）。（2002 年 8 月）（133 ペ）

◇まとめ・つぶやきなど

○【情報の発信と受信について考えてみた】

◆何か面白いことがあったときには，それを誰かに話してみるとよい。その理由は，①それがなぜ面白いのかを相手の立場に立って客観的に考え直すことができる。②アタマと身体を使うことにより，鮮明に記憶に残すことができる。

◆（特別な場合を除いて）出し惜しみは良くない。その道に通じている人であればあるほど，求められれば，惜しみなく教える場合が多いようだ。たぶん，発信することにより，発信しない場合よりもより多くのことが得られることを，経験上，知っているからではないだろうか。〔5 月 5 日（日）11:25 思い立ってフェイスブックに投稿〕



○「今までの学校（学校教育）・新聞・テレビ」は「少品種多量生産」という発想。これに対比して，「これからの教育・本・求められる人」は「多品種少量生産」という発想。〔5 月 5 日（日）子どもの日 11:26 自宅にて，ほうじ茶を飲みながら〕

○（ジムで会った武井さん・仮名と話すことで得られた）理想的なランニング・フォームについてのメモ

・もっと地面を蹴って走った方がラク。

・大腿筋で着地するというイメージが大切。

・丹田で走る。

・前傾しない。

・背骨を支えとして垂直に近い形になること。

・Self check（省察）→Strategy（戦略）→Solve（選択）→最初に戻る（循環）（ら

せん状にレベルアップ）〔5 月 5 日（日）以前に書いておいたメモから転記〕

○「サイエンス・シアター運動」について。「家庭に科学を」というのはタテマエであり，ホンネは「仮説実験授業関連のことを思いきり贅沢にやってみる」という先駆的な運動形態なのではないか。ホンネは案外「贅沢は素敵だ」だったりするのではないか。研究と啓蒙とを一体のものとして考えるのが板倉式研究法の特徴。啓蒙を主として学校からスタートするという試みは成功した。そしてその次の段階として「豊かな家庭」への普及を目指したということなのではないか。ヨーロッパの科学を楽しむ伝統に即して類推的に考えてみれば，自然なことと理解できる。そして，その目指すところは何だったのだろうかと考えると，今までと違った興味が湧いてくる。〔5 月 5 日（日）以前に書いておいたメモから転記〕

○天動説は「神の視点」があって初めて理解できる。「私がいる場所の客観的認識」。俯瞰してみる。

○理想の教師は「触媒」である。

○「リーマン・ショック」と韻を踏んで「レーニン・ショック」という現象を考えてみた。後世の歴史家の視点から歴史を俯瞰して考えてみた。

◆来月以降に読む予定の本

◎野村克也著『野村ノート』（小学館・2005 年）（私物）

◎半藤一利・出口治明共著『明治維新とは何だったのか』（祥伝社・2018 年）（私物）

◎牧衷著『寛容思想の成立と発展』（上田仮説出版・2018 年 7 月 30 日刊）（私物ガリ本）

◎ガリ本『板倉式発想法と組織論 1996』（マタギ書房）

◎佐藤義典著『図解・実践マーケティング戦略』（日本能率協会マネジメントセンター・2005 年）（私物）

◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987 年）（私物）

◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経 BP クラシックス・2010 年）（私物）

◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011 年）（私物）

◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017 年）（私物）

◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013 年）（私物）

「最後までお読みいただきありがとう」〔2019 年 5 月 18 日（土）17:50，PTA 駐車誘導楽しいな〕